

古書の愉しみ（令和三年七月）

土屋 博

一「日本外史字引 全」三重縣貫屬土族野呂公敏編輯

（東京府貫屬土族島次三郎藏版、明治六年夏八月新鑄、三十六丁）

日本外史中の漢字を畫數順に列擧す。一畫の一、乙、二畫の人、入、又、力、二、乃、了、丁、刀、八、七、十、九より、二十七畫の驥（をどりあがる）、驩（よろこぶ）、二十八畫の蠶（かひこ）まで。

明治六年八月の新鑄（セン、木版の彫り直し）なれば、絲の解れこそあれ、本の状態、概ね良好なり。類書は數多蒐集しつれど、和紙の包装紙附きものは滅多に無ければ、古書蒐集家としては嬉し。

二「日本外史稱呼訓 乾坤」松山富美輯

（京都書林三書樓藏版、明治六年八月發兌、合計三七丁）

凡例に曰く、「童蒙讀日本外史者、若地名人名稱呼、難讀得者不尠矣」と。

平氏記の三善清行（ミヨシキヨツラ、參議宮内卿）より徳川氏記の興子（オキコ、明正天皇）まで。

本書を予め通讀せば、日本外史の素讀、獨習にても極めて容易となるらむ。

但し、キヨツラに關しては、キヨヤスなる讀み方も三善家に根據ありて有力なれば、本書の利用に關しては一應の注意を心掛くべし。

三「評註 山陽詩鈔 全四冊」頼久太郎著、後藤松陰評註

（浪華三書房藏、明治十五年十二月版權免許、明治十六年二月出版、一五丁+廿三丁+十一

七丁+廿四丁、帙入）

從來所有したる書籍と同一出版社、同一内容なれど、從來の合本版とは異なり、今回見つけたるは、四分冊の形態なること珍しく、且つ帙入りなれば豪華なり。四冊とも、文の區切り毎に朱筆認められ、熟讀せられたる形跡あるは貴重。

四「袖珍唐詩選講話 上下」日本森槐南題詞、清國何德淳・日本富塚鹿樵講述

（梁江堂書房、明治四十三年刊、各定價六拾錢、合計七一八頁）

例言數 則に曰く、「古人は作文の心得として多作は多改に如かず多改は多讀に如かずといつたが獨り作文の心得のみではない。余は作詩の心得として此語の最も適切なるを信ずるのである。・・・次に模範的傑作は如何にして之を求むべきかと云ふに之を唐代諸家の集中に就いて求むるが可いのである。」と。

なほ、本書の特色は、それぞれの詩につき、日本名家の關聯作品も併せて掲げられたる點にあり。我が國に於ける唐詩選受容の永き歴史も感ぜらる。

以下、小生の唐詩選より抽出したる名文句のアンソロジーなり。

（七言絶句）

「酔て沙場に臥す君笑ふ莫れ 古來征戰幾人か回る」（王翰「涼州詞」）

「峨眉山月半輪の月 影は平羌江水に入て流る」（李白「峨眉山月歌」）

「朝に辭す白帝彩雲の間 千里江陵一日に還る」（李白「早發白帝城」）

「落陽の親友如し相問はゞ 一片の冰心玉壺に在り」（王昌齡「芙蓉樓送辛漸」）

（五言絶句）

「宿昔青雲の志 蹉跎たり白髮の年」（張九齡「照鏡見白髮」）

「頭を擧て山月を望み 頭を低て故郷を思ふ」（李白「靜夜思」）

「白髮三千丈 愁に縁て個の似く長し」（李白「秋浦歌」）

「空山人を見ず 但人語の響を聞く」（王維「鹿柴」）

「深林人知らず 名月來つて相照らす」（王維「竹里館」）

「春眠曉を覺えず 處處啼鳥を聞く」(孟浩然「春曉」)

(七言律)

「昔人已に黃鶴に乗じて去る 此の地空しく餘す黃鶴樓」(崔顥「黃鶴樓」)

「無邊の落木蕭蕭として下り 不盡の長江滾滾として來る」(杜甫「登高」)

(五言律)

「氣は蒸す雲夢澤 波は撼かす岳陽城」(孟浩然「臨洞庭」)

「大漠孤烟直く 長河落日圓なり」(王維「使至塞上」)

「吳楚東南に坼け 乾坤日夜浮ぶ」(杜甫「登岳陽樓」)

(七言古詩)

「君見ずや管鮑貧時の交り 此道今人棄てゝ土の如し」(杜甫「貧交行」)

「之を吹て一曲猶未だ了らず 愁殺す樓蘭征戍の兒」(岑參「胡笳歌」)

(五言古詩)

「人生意氣に感ず 功名誰か復た論ぜん」(魏徵「述懷」)

「長安一片の月 萬戸衣を擣つの聲」(李白「子夜吳歌」)

「馬より下して君に酒を飲ましむ 問ふ君何くに之く所ぞ」(王維「送別」)

(註) 排列は、本書の順序に従ひ、李于麟の唐詩選原本とは異なる。

五「教科適用 日本外史鈔」飯田傳一編

(東京日進堂、大正十五年三版、臨時定價六拾六錢、本文一五九頁)

初版は大正十三年。中學校漢文科用の文部省檢定濟み教科書。

凡例に曰く、「外史の一たび世に出づるや殆んど家毎に藏して讀まざるものなかりきと云ふ。宜なる哉明治維新の大原動力を爲したりと稱せらるることや。外史の文章概して雅健明哲、讀者をして自ら奉公殉國の心を感發せしむるものあり。されど巻帙較々浩瀚直に以て教課とするに適せず、是れ余が鈔録の擧ある所以なり」と。

「忠盛興家」、「平治之亂」、「重盛忠孝」より「家康言行」、「秀忠謹厚」、「家光諭侯伯」までの五十篇を収録す。

六「唐詩選全釋」平野秀吉著

（東洋圖書刊行會、昭和四年刊、定價金四圓、本文七八六頁十句釋索引四四頁、詩句索引六六頁）

例言に曰く、「文部省が教員檢定に於て漢詩の代表として唐詩選を國語漢文科受験者の必讀書と定めたのは當然である。されば毎回例外無く此書中から一二問を課せらるるに係らず長蛇を此一角に逸する者の多いことを聞くのは、主として良參考書の無い爲に立入り難く敬遠されてゐるのではあるまいか。」と。

本書の特色は索引の充實せる處なり。巻尾の句釋索引及び詩句索引は、創意に滿ち、「五十音索引唐詩大觀」と稱すべきものなり。

七「日本外史詳解」磯野貞二郎著

（健文社、昭和五年廿二版、定價壹圓五拾錢、本文七〇六頁十年表・索引）

初版は昭和四年。例言に曰く、「今日世に行はれてゐる中等教科書としての外史鈔本は、その何れの發行を問はず、悉く本書一卷に網羅されてゐることゝ信ずる。」と。

なほ、本書は論贊部分には觸れず、「日本外史論文詳解」なる別の一冊を準備する豫定とあり。（實現したるかは不明。）

八「日本之儒教」

（日本儒教宣揚會、昭和九年刊、非賣品、二八四頁）

大東文化學院の加藤政之助總長（貴族院議長、嘉永七年生れ、昭和十六年歿。）が中心となり、昭和九年一月二十七日に東京會館にて舉行せられたる我邦先儒の祭典を永遠に記録する爲に編纂せられたる書籍なり。

加藤總長の式辭によらば、「物質文明の進歩に伴隨して忌むべき個人主義・功利主義の害毒を一掃して日本の天地を淨化するの道は皇道、國體に醇化せる儒教を宣揚し傳統的仁義忠孝の感念を喚起すること第一なり」との由。

祝辭には、内閣總理大臣子爵齋藤實（「方今中外依然として非常の世局に遭遇す。冀はくは本會關係諸君協心戮力益々箇事の爲めに邁往し邦家徳教の盛を致すに裨補せられむことを。」）、内務大臣男爵山本達雄（「顧ふに輓近世態の推移に伴ひ人心漸く輕佻浮華に流れ思想動もすれば中正を失ひ詭激に赴かんとするの傾向あるは眞に國家の爲深憂とする所なり。」）、文部大臣鳩山一郎（「永き國史の成跡から推して數世紀後に於ける世界の運命を卜しますれば西洋文化もいつかは我が國民の手で同化の洗練を経る時代に到達するであらうと考へます。」）、宮内大臣湯倉平（「一千數百年來培ひ來れる我國の道義は實に儒教を其の準則と爲せり。皇道精神は殆んど其の精華を此に繹ねざるべからず。」）、滿洲國立法院長趙欣伯（「儒教は東洋精神の總締にして人生大道の軌範たり。」）、貴族院議長公爵近衛文麿（「儒教の我が國に傳はりてより千六百年其の教旨は已に我が國體に醇化せられ人倫を正し綱常を扶植し以て國運の隆昌に資せしは我が國史の上に炳乎として明かなり。」）、など名前を列ね、壯觀と云ふべし。

本書掲載論文のうち注目すべきは、安井小太郎氏（學習院、一高、大東文化學院の教授を歴任。儒學者安井息軒の孫。昭和十三年歿。）の「日本儒教について」なり。曰く、「本來の儒教と醇化せる儒教との大なる差異は忠孝の説にあり。支那は易姓革命の行はるゝ國なるを以て、忠を以て教の本とする能はず、故に孝を本として教を立つ。我邦の如く萬世一系の國體に於ては忠を以て教の本とすべきは言ふまでもなし。」と。

（令和三年七月五日受附）